



第8図 レーダー・アメダス合成図 (気象庁)
1988.7.15 (04~05時)

る巨大積雲対流に相当するもの(第7図)であって、前述の短時間強雨域にも符合している。

また第8図の気象庁レーダーアメダス合成図にも、15日04時~05時に100 mm/hrを超すピークが浜田市付近の海岸からやや入った山間部に解析されていることがわかった。

米子測候所の鉛直断面図によると、14日21時には最下層が暖気移流で $\theta_e 355^\circ\text{K}$ 以上の湿潤域先端に当り、600~750 mbは寒気移流となっている。また低相当温位域が中層にあって、鉛直的に相当温位密度が大きい成層となっていた。当時の鉛直循環はこの大きな対流不安定のもとで顕著に発達したものと考えられる。

但しエコー域が山岳地帯にさしかかって定着し、かなり極端な雨量分布を示すことのある経験にもとづくならば、今回の如く強雨域が形成持続した雲城山周辺、或は中国山地の稜線が海岸に迫った地点に、雨量以外の観測施設も設けて、局地的強化への地形の影響を解明される緒がつかめればと考えるものである。

日本気象学会誌 気象集誌

第II輯 第68巻 第2号 1990年4月

村上正隆：孤立した対流雲の力学的・微物理学的変化の数値モデリング

—1981年7月19日 CCOPE 期間中に観測された雲について—

平沢尚彦・安成哲三：インドモンスーンの30-60日振動に関連したアジア~西大西洋における大気循環の変動

B.G. Hunt：日変化するモデル大気における重力波の特性と相互作用のシミュレーション

猪川元興：2次元の山を越える2層成層流体の高ドラッグ(高抵抗)状態とフェーンについて

露木 義：気象庁全球モデルによる30~60日振動の予報とその延長予報への影響

塚本 修・大滝英治・石田廣史・堀口光章・光田 寧：船舶を用いた海洋上での乱流輸送量の直接測定

J.Pudykiewicz：大気トレーサーの予報モデル

渡辺 力・近藤純正：植被の構造や密度が混合距離に及ぼす影響

In-Sik Kang, K.-M. Lau：全球平均角運動量の30-60日振動にともなう熱帯循環の時間発展(北半球が夏の場合)

鬼頭昭雄・山崎孝治・時岡達志：気象研究所大気循環モデルによる南半球の二重ジェットと半年振動のシミュレーション

高野 功・中村 一・巽 保夫：局地スペクトルモデルの非線形ノーマルモードイニシヤリゼーション

田口彰一：北半球中緯度の総観規模移動性擾乱の1969年から1979年にかけての減少傾向